

人外魔境

遊魂境

小栗虫太郎

青空文庫

死体、櫓を駆る

いよいよ本篇から、魔境記も大ものばかりになってくる。まず、その手初めが『Ser-mik-suah』セル・ミク・シユア『グリーンランド中部高原の北緯七十五度あたり、氷河と峻険と猛風雪と酷寒、広こうぼう茫ようぼう数百の氷河を擁する未踏地中のそのまた奥。そこに、字義どおりの冥路よみじの国ありという、『Ser-mik-suah』セル・ミク・シユア『は極光下の神秘だ。では一体、その「冥路セル・ミク・シユアの国」とはどういうところか。

まず、誰しも思うのは伝説の地だということ。グリーンランド

の内部は、八千フィートないし一万フィートの高さのわたり、大高原をなしている。そして、それを覆う千古の氷雪と、大氷河のいにしよ囿繞。とうてい五百マイルの旅をして核心を衝くなどということは、なまみ生身の人間のやれることではない。だから、そこに冥路の国がある、死んだ魂があつまる死霊の国がある——とエスキモー土人が盲信を抱くいだようになる。

と、これがマアいちばん妥当なところで……たぶん皆さんもそうお考えであろうと思われる。また、「冥路セル・ミク・シユアの国」について多少の知識のある方は、一歩進んだものとして次のようなことも言うだろう。

マライ馬來のアモック狂狼症をジャングルの妖とすれば、「冥路セル・ミク・シユアの国」の

招きは氷の神秘であろう。それに打たれた土人は狂気のようになり、家族をわすれおのが生命をも顧みず、日ごろ怖れている氷嶺の奥ふかくへと、櫂そりをまつしぐらに走らせてゆく。まばゆい、曼珠沙華んじゆしやげのような極光オーロラの倒影。吹雪、青の光をふきだす千仞せんじんの氷罅クレヴァス。——いたるところに口を開く氷の墓の遙かへと、そのエスキモーは生きながら呑まれてゆく。

と、いうように氷の神秘と解釈する。それだけでも、「冥路セル・ミク・シユア」は興味津々しんしんたるものなのに、一度折竹の口開かんか、そういう驚異さえも吹けば飛ぶ塵のように感じられる。それほど……とは何であろう。曰く、想像もおよばず筆舌に尽せず……ここが真の魔境中の魔境たる所以ゆえんを、これからお馴染なじみふかい折竹

の声で喋らせよう。

「なるほど、君も『冥路セル・ミック・シユアの国』について、ちつとは知っているね。だが一つだけ、君がいま言ったなかに間違いがあるよ。というのは、『冥路セル・ミック・シユアの国』の招きでエスキモーが橇そりを走らせる。まるで、とつ憑つかれたようになって、夢中でゆく。というなかに、一つだけある」

「へええ、というと何だね」

「つまり、生きた人間ではないからだ。その、橇をはしらせるエスキモーは、死んだやつなんだ」

「そうだろうよ」と、私はひとり合点をして、頷うなずいた。ついに、折竹も語るに落ちたか、魔境中の魔境などと偉そうなことをいう

が、やはり結句は、死霊あつまるというエスキモーの迷信譚^{たん}。よしよし日ごろやつつけられる腹癒^{はらい}せに今日こそ虐^{いじ}めてやれと、私は意地のわるい考えをした。

「なるほど、死んだ人間が櫛^かをはしらせる。じゃそれは、魂なんでものじゃない、本物の死体なんだね」

と参ったかとはかりに言うと、意外なことに、

「そうだ」と折竹が平然というのである。

「死体が櫛^かを駆^かる。ふわふわと魂がはしらせる幻の櫛^かなんて、そりや君みたいな馬鹿文士の書くことだ。あくまで、冷たくなつたエスキモー人の死体。どうだ」

私は、しばしは唾^{あぜん}然たる思い。すると、折竹がくすくすツツと笑

いながら、懐ふところから洋書のようなものを取りだした。みると「グユーベル・グレイランズ・グレッツチエルウエルト
リー・ンランズ」の氷河界」という標題。一八七〇年にグリー
ンランドの東北岸、マリー・ファルデマー岬に上陸したドイツ
隊の記録だ。それを、折竹がパラパラつとめくり、太い腕とともに
にぐいと突きだしたページには、

翌五月十六日、依然天候は険悪、吹雪はますます激しい。天幕テント
内の温度零下五十二度。囊内からはく呼吸いきは毛皮に凍結し、天幕テント
のなかは一尺ばかりの雪山だ。すると突然、エスキモーの「トク
ooka-Shoo 《エ・ツーカー・シユー》」が死んだような状態になっ
た。脈は細く、ほとんど聴きとれない。体温は三十二度。まさに

死温。

地図Ⅱグリーンランドとセル・ミク・シユア

「死んだよ」と、私がもう一人のエスキモーの『AL-Ning-Wa
《アル・ニン・ワ》」にふり向いて、

「だが、どうして急にこんな状態になったか、わからん。さつき
まで、ピンシャンしてた奴が、急にこうなっちゃった」

と、その時だ。いきなり、死んだはずのエ・ツーカー・シユアが、
むつくと起きあがった。蘇えったか、と、支えようとする私をア
ル・ニン・ワは押しとどめ、

「死んでいるだよ。動いているだが、エ・ツーカー・シユアは死ん

でいるだ」という。私が、なにを言うかと屹ぎツとみる目差まなざしを、その老エスキモーは受けつけぬように静かに、

「論より証拠というだて、ちよつと手を握つてみなせえ、脈はあるだかね。おいら、生きてる人間みてえに、暖かになつたかね」なるほど先刻さつきと、彼のいうとおり少しも變つていない。死体がうごく——と、呆氣あつけにとられた私にアル・ニン・ワは言い続ける。「そつとして……。旦那は、何もしねえほうが、いいだよ。エ・ツーカ・シユーは、これから『冥路セル・ミク・シユアの国』へ召されるところだから。死骸になつてから行かされるなんて、おいらの種族はなんて手間が掛るだべえ」

とみる間に、エ・ツーカ・シユーがのっしのっしと歩きはじめ

★北極

ランド

メアカ
氷河

アムール川
ラシド
エリクセン
ランド

探検家エリクセン死去地

ピタ

ホルランド

ワシントンランド

フムホルト
氷河

ケ入江

エター部落

スミス瀬戸

一九三一年
フォングロナウ飛行通路

セルミックシヤ
?

折竹の攻撃通路

ハフナー山

「デーヴルス・シヤム
悪魔の拵指」

バッフィン湾

メルウイル湾

クラント
ランド

フリント
ランド

エレスメアラント

た。まるで、ゼンマイ人形のような機械的な足取り。やがて天幕テントをまくったとき吹きこむ粉雪のために、彼の姿は瞬間にみえなくなった。それなりだ。橇犬の声はやがて外でした。岩がちぎってくるような吹雪の合間合間に、しだいに遠ざかってゆく鈴の音、犬の声。

行ってしまった。極北の神秘「冥路セル・ミク・シユアの国」は実在せり！
エ・ツーカー・シユーは死体のまま橇を駆り、晦冥かいめいの吹雪をつき氷の涯はてへと吞まれたのだ。

なんたる怪か——と、あきれられる私の耳元へ折竹の声。それが、また意味はちがうが打ぶん殴なぐるような驚きを……。

「どうだい、僕が魔境中の魔境といったのも、ハツタリじやあるまい。それに、この探検にはひじょうな意義がある。じつは、国際法の先^{せん}占^{せん}問題にも触れている」

と、私に固唾^{かたず}をのましたその「先占」とは。例をわが国にとれば、南極問題あり。かの大和雪原領有を主張する、白瀬中尉の熱血。また近くは、フランスと争った新南群島の先占。いずれも事新しいだけに賢明な皆さんのまえで、この言葉の説明の必要はあるまいと思われる。つまりこれは、無主の地へいちばん先に踏み入ったものが、その本国政府に言って先占宣言をさせる。今後この地は自国の領土である、異議あるものは申し出い———というのが「先占」。

では今、国際紛争を^{ほの}仄めかすような先占問題がからむという、

極北のその地とは一体どこのことだろう　私は、深くも聴かず

ひとり合点をして、

「なるほど、それが『冥路^{セル・ミク・シユア}の国』探検の副産物というわけだ

ね。じゃ、どこだ？　その、新発見の北極の島つてえやつは」と
言うのと、折竹はいけぞんざいに手をふつて、違う、と嘲けるよう
に言う。

「島じゃない。その無主の地というのは、グリーンランドの内部^{なか}
だ」

驚いた。現実を無視するにもこれほど痛快なものに、私はまだ
出会ったことがない。

全島、ヨーク岬をのぞくほかデンマーク領のグリーンランド——よしんば内部なかが、「冥路セル・ミク・シユアの国」をふくむ広茫こうぼうの未踏地とはいえ、沿岸を占めれば自然奥地も領地となる——国際法には奥地主義の法則がある。それでは、先占云々うんぬんの余地は完全にないではないか。無主の地はたとえ一坪たりと、いま北極圏の大島グリーンランドにはないのだ。それにもかかわらず……。

と、いうところが「死体駆る櫓そり」とともに、「冥路セル・ミク・シユアの国」探検の大眼目になっている。しかしこれは、暫く興味上保留しばらすることにして、では、そこを先占しようとしたのは、いずれの国であらう。訊くと、折竹は紅潮さえもうかべ、

「どこって　それが他の国ならいう必要のないことだ。日本政

府が、もしも僕の仕事を追認してくれてだね、『冥路セル・ミク・シユアの国』の先占宣言をしてくれたら……」

ここで、もはや言うべき言葉もなくなった。ドイツ人が夢想す

アイランド・アルクチス

る新極北島を徒手空拳で実現しようとした折竹の快拳

ひょうめいきよう

談。氷冥郷をあばく大探検にともなう、国際陰謀と美しい

情火のもつれを……。さて、彼に代ってながながと記すことにしよう。

ファティマ
大力女おのぶサン

全米に、かなり名の聴えたウインジャマー曲馬団サーカスが、いまニユ

ーヨーク郊外のベルローズで興行している。サーカスの朝はただクッキング・テント料理天幕が騒がしいだけ……。芸人も起きてこず野獣の声もない、ひっそり閑とした朝まだきの一刻がある。そのころ、水槽をそなえた海獣の檻のまえで、なにやら馴育師から説明を聴いているのが……。というよりも甚だしい海獣の臭気に、鼻を覆うていたのが折竹孫七。

「これが、今度入りました新荷でがして」と、海豹あざらし使いのヒュ
ーリンググがしきりと喋っている。なかには、海豹、海驢あしか、緑グリーン
海豹シールなど十匹ほどのものが、鰭ひれで打ちあいウオーウオーと咆ほ
えながら、狭いなかを捏こねかえすような壮観だ。

「じつは、なんです。これは、さるところから纏まとめて手に入れま

して……、さて、訓練にかかったところ、大変なやつが一匹いる。どうも見りや海豹あざらしではない。といって、膾炙おつとせい獣でもない、海あ驢しかでもない。海馬でもなし、海象ウオーラスでもない。さだめしこれは、新種奇獣だろうてえんで、いちばん折竹の旦那にご鑑定をねがったら、きつとあの不思議な野郎の正体が分るだろう……」

というところへ「これはご苦労さんで」と、親方のウインジャマーが入ってきた。ウインジャマーは、きよう折竹の連れである自然科学博物館の、ケプナラ君とは熟知の仲である。ぺこぺこ頭をさげて折竹に礼をいってから、おいキャプテンと、ヒューリングに言った。

「こりやね、一つお前ばなしさんに仕方ばなしをして貰おうよ。海獣けものの訓練

の順序をお目にかけてからでない、どんなにあの野郎が手端に
負えねえやつかということが、旦那がたに呑み込めねえかも知れ
ねえから……」

と、ヒューリングがまず西洋鎧よろいのような、鉄葉ズボンティン・パンツという足
部保護具くぶをつける。これを着けないと、いつ未訓練のやつに、が
りがりつとやられるかも知れない。檻おりの戸をあけてそつと内部なかに
はいると、見かけは鈍重そうな氷原の豹どもも、たちまち牙を露む
きだし、野獣の本性をあらわしてくる。ヒューリングは、鉄葉ズ
ボンティン・パンツのうえをガリガリやられながら、鉄棒につかまって外側へ声
をなげる。

「最初は、生魚食いのこいつらに、死魚を食わせる。ぴんぴん糸

で引っぱって躍らせていると、うっかり生きてると間違えて、ガブリとやる。そうして、餌えきについたら、もう占めたもんで……。まもなく、飾パデストールり台のうえに、ちよこなんと乗る。撞球棒キユールのうえへ玉をのせたのを、鼻であしらいあしらい梯子はしごをのぼってゆく。それから、梯子の頂上でサツと撞球棒を投げ、見事落ちてくる玉を鼻はなづら面で受けとめる。

——というようになれば、いっぱしの太夫。手前も、給金があるという嬉しい勘定になる。ところがです、あの『Gori-Nep

《ゴリ・ネプ》の野郎ときたら手端にも負えねえ」

「『Gori-Nep 《ゴリ・ネプ》 “ って? ” と折竹がちよつと口を挟はさんだ。

「つまり、野郎は演芸用海豹仲間のゴリラですからね。マア、この鉄葉ズボン（ティン・パンツ）の穴をみてくださいよ。たいていの海獣（けもの）なら二、三度で噛み止みますが、あいつの執念ときたらそりや恐ろしいもんで……。ええ、その大将はすぐ参ります。じつは、野郎だけが独房生活で」

その、通称『Gori-Nep』《ゴリ・ネプ》という得体のしれぬ海獣を、まもなく折竹はしげしげとながめはじめた。身長は、やや海豹（あざらし）くらいだが体毛が少なく、まず目につくのがおそろしく大きな牙。おまけに、人を見る目も絶対なじまぬ野性。ついに折竹にも見当つかずと見えたところへ「あれかな」と、連れのケプナラを莞爾（かんじ）となつて、ふり向いた。

「ケプナラ君、君はエスキモー土人がいう、『A-Pellah』《アー・ペラー》を知っているかね」

「アー・ペラー いったいどうに知らんが、なんだね」

「海豹あざらしと海象ウオーラスの混血児あいのこだ。学名を『Orca Lupinum』《オルカ

・ルピヌム》まと行って、じつに稀まれに出る。その狂暴さ加減は学

名の訳語のとおり、まさに『鯨狼』という名がぴたりと来るよう

なやつ。孤独で、南下すれば膾炙おつとせい群をあらず。滅多にでない

から、標本もない。マア、僕らは、きよう千載に一遇の機会で、

お目にかかれたというわけだ」

「ううむ、そんな珍物かね」と、温厚学究君子のケプナラ君は感

じ入るばかり。果して、この奇獣は唯ただもの者ではなかった。やがて、

折竹を導いて「冥路セル・ミク・シユアの国」へと引きよせてゆく、運命の無言の使者だったのだ。咆ほえもせず、じつと瞳を据すえて人間を見わたしている、狡智こうち、残忍ぞというか慄ぞつとなるような光。これぞ、極洋の狼、孤独の海狼と——なんだか睨にらみかえしたくなる厭いやな感じが、ふとこの数日来折竹に絡まわりついている、ある一つの異様な出来事を思いださせたのである。それは、両三度を通じておなじような意味の、次のような手紙が舞いこんできたのだ。

敢あえて小生は、世界的探検家なる折竹氏に言う。この地上にもし、まだ誰も知らず一人も踏まぬ国ありとすれば、その所在を、ご貴殿にはお買い取りになりたき意志なきや。小生は、それほど

のものを売らねばならぬほど、目下困窮もっかを極めおり候。

明日、午後三時より三時半までのあいだ、東二十四番街のリクリエーション埠頭パイアーの出際、「老鴉オールド・クロウ」なる酒場にてお待ち申しおり候、目印しは、ジルベーのジンと書いてある貼紙はりがみの下。

K・M生

未知の国売物うりもの——じつに空前絶後ともいう奇怪なことである。まして、国というからには単純な未踏地ではあるまいが、まさか、そんなものがこの地上にあらうとは思われない。折竹はなんだかからか揶揄からかわれるような気がして、ついに、二度三度と手紙がきても行

かずにいた。

と、つぎに昨日のことだった。ふいに、男女二人の訪客があつて、その名刺をみたときオヤツと思つたほど、じつにそれが意想不到的の人物だつたのだ。

無疵ラッキイのルチアノ——いまタマニーに風を切るニューヨークの大親分。牝ニッキイ鶏フロア、彼の情婦で魔窟プロステイチユーション・シンジケート組合

の女王、千人の妓と二百の家でもつて、年額千二百万ドルをあげるといふ、大変な女だ。そういう、暗黒街に鳴る鏘そうそう々たる連中が、いかなる用件があつてか丁重きわまる物腰で、折竹の七十五番街の宿へやつてきた。

世界的探検家対ギャングスター・ナンバーワン。まずこれは、一

風雲必ずやなくてはなるまい。

「ご免なすつて」と人相は悪いがりゆつとした服装の伊太公イタ、フローは、まだ若くガルボ的な顔だち。しかし、くばいざい駆黴剤くばいざいの浸染しみはかくしおお了せぬ素姓をいう……、いまこの暗黒街を統すべる大顔役ボス二人が、折竹になに事を切りだすのだろう。

「じつは、高名な先生にお願いの筋がござんして。と、申しますのは余の儀でもござんせん。ここで、分りのいい先生にぐいと呑みこんで頂いて……」

「なにをだ」

「すべて、どこへ行くとか何をするとか——その辺のところは一切つさいお訊きにならず、ただ手前の指図どおり親船に乗った気で、

ちかく『Salem 《サレム》』をでる『フラム号』という船のつて頂く」

「おいおい、俺をどこかの殴りこみに連れてゆくのか」

「マア、お聴きなすつて」と、ルチアノはかるく抑え、

「で、その船は北へ北へとゆく。すると、そのどこかの氷のなかにだね。ぜひ先生のお力を拝借せにやらねえものが、おいでを、じつと待つてるんですよ」

「では、そこは何処なんだね。また、僕の力を借りるとは、何をすることなんだ？」

「どうか、それだけはお訊きにならねえで。ただ、申しあげておくのは、けつして邪やましいことじゃない。法律に触れるようなこと

では絶対にないという……その点だけのご安心願いたいもんで」

折竹は、ただただ呆れたように瞬しばたくだけ。ギャングども、大変

なことを言つてきやがった。俺の力を、借りたいというからには探検であろうが、いま、年収八千万ドルといわれるルチアノの仕事なら、あるいはそれが途方もないものかも知れぬ。どこだろう、北へ北へといって氷のなかに出る　はてなど、思いめぐらすが、見当もつかない。ただ、匂つてくるのは黒暗々たる秘密のにおい。

「ねえ、先生、ご承知くださいませいなね」

と、フローが間に耐えられないように、

「私たちだって、偶たまにや真面目な稼ぎの一つくらいはしますからね。先生にだって一生楽に暮せるくらいのお礼は差しあげるつ

もりなんですよ。ねえ、先生だったら、うんと言って……」と、それでも黙っている折竹に焦れたのか、それともフロアの本性が、じりじりつと癩癩筋^{かんしゃく}。

「じゃ、私たちの仕事なんて、お気に召さないんだね」

「マア、言やね」と折竹はハッキリ言った。すると、扉のそとでコトリコトリと足音がする。いるな、ルチアノの護衛、代理殺^{トリツガー}。人者^{マン}のジツプか　　と思つたが顔色も変えない、折竹にはルチアノも弱つたらしい。

「ご免なすつて。牝の蹴合鷄みたいな阿魔^{あま}なんで、とんだことを言いやして。とにかく、この問題はお考え願つときましよう。いずれば、うんと言つて頂かなきやルチアノの顔が立たねえが、そ

んな強^{こわもて}一面は百万だら並べたところで、先生にや効目^{ききめ}もありますまい。なア、俺らが来てもビクともなさらねえなんて……、フロ
ー、お立派な方だなア」

折竹は、その間ものんびりと紫煙にまかれている。代理殺人^{トリツガー・マ}
者^ンの銃口を扉のそとに控えていても、暗^{アンダーウールド}黒^{えんま}街^のの闇魔夫婦

を目のまえに見ていても、不義不正や圧迫には一分の揺ぎもしない彼には、骨というものがある。静かだ、ウエスト・エンド^{アヴェ}通^{ニユー}
りの雑踏が蜂のうなりのように聴えてくる都心紐育下町^{マンハッタン}のなかにも、こうした閑寂地がある。がいよいよルチアノも手がつけられなくなつて、

「マア、これをご縁にちよいちよい何ううちにや、先生だつて情

にからむだろう。なにも、殴り込みばかりが能じゃねえ。誠心誠意という、こんな手もありませア」

「おいおい、ギャングの情にからまれるのか」

「そう仰言られちゃ、身も蓋もねえが」

とルチアノは苦笑しながら立ちあがる。が、なんと思つたか、ちよつと目を据えて、

「時に、あつしらしくもねえ妙なことを伺いやすが……最近、先生んところへ匿名の手紙が来やしませんか」

「来たよ。しかし、地獄耳というか、よく知ってるね」

「ご注意くださいが、絶対あんなものには係わらねえほうが、いい。ずいぶんコマゴマしたことで、無駄な殺生をしたり、ケチな強請

をするために大変な筋書を書く——というような奴が、ゴロゴロしてきますから。そこへゆくと、あつしらは ビジネス 実業で……」

と、これがルチアノの帰りしなの台辞せりふだった。

二人が帰ると、ギャングという初対面の怪物よりも、なにを彼らが企てつつあるのか、陰の陰の秘密のほうに心が惹ひかれてゆく。

極洋——そこにルチアノ一味がなにを目指している　いわば

変態ではあるが一財閥ともいえる、ルチアノ一派の実力で何をしようとするか　またそれがあの手紙の主とどんな関係にあるのだろう　と思うと、イースト・サイドの貧乏窟ふるでせつかくの秘密をいだきながら、ギャングの圧迫のためうち顛くるえている、一人の可憐な乙女が想像されてくる。

未知の国売物——それと、ルチアノ一味のギャングとのあいだには、見えない糸があるのではないか。

行ってみよう、彼はやつとその気になった。が「オールド・クロウ老鴉」

というその酒場へいってみると、すでに日も過ぎたが、それらしい人影もない。見えない秘密、いや、逸してしまった秘密……とやきもきとした一夜が過ぎると、翌朝はケプナラとともにウインジャマー曲馬団。サーカスいま、彼はあれこれと思いながら、奇獣「アール鯨ペラー」のまえに立っているのだ。すると、ケプナラがウインジャマー親方に、

「だが、よくこのアール・ペラー鯨狼は餌につきましたね」

「そこです。最初は、誰がやっても見向きもせんでした。ところ

が、相縁あいえんきえん奇縁きえんというかたつた一人だけ、この先生に餌を食わせる女がいる。呼びましよう。オイ、牝河馬ファティマのマダムに、ここへ来るようにつて」

と、やがて現われたのが意外や日本人。『Onbu-san』《オノブ

・サン》, the Fatima 《ゼ・ファティマ》〃——すなわち大女おの

ぶサンという、重錘揚げの芸人だ。身長五尺九寸、体重三十五貫。

大一番の丸鬚まるまげに結つて肉襦袢タイツ姿、それが三百ポンドもある大重

錘をさしあげる、大和撫子やまとなでしこならぬ大和鬼蓮おにはすだ。

狂人の無電か

「おやおや、故国くにの人だというから、もうちつと好い男だと思つたら……。えつ、あんたがああ、探検屋折竹」

ところが、折竹にひき合わされたおのぶサンの第一声。サーカスサーカスに在るだけにズケズケと言う。悪口、諧かいぎやく、諛だじゃれ、駄洒落連発のおのぶサンは一目でわかる好人物らしい大年増。十歳で、故郷の広島をでてから三十六まで、足かけ二十六、七年をサーカス暮し。このウインジャマー曲馬団サーカスの幌馬車時代から、いま、野獸ミナジリ檻デンだけでも無蓋貨車マフラット・カーに二十台という、大サーカスになるまで、浮沈を共にした、情にもろい気さくな性格は、いまや名実ともにこの一座の大姉御おおあねご。といつて、愛嬌はあるが、寸分も美人ではない。まあ、十人並というよりも、醜女しこめのほうに分があるう。

「ほら、私だといふとこんな具合で、化物海豹あざらしめが温和おとなしくな
つちまう」と、餌桶いっぱいの魚をポンポンくれているおのぶサ
ンと、^{ア・ペラー}鯨狼をひき比べてみているうちに、折竹がふうつと失
笑をした。それを見て、

「この人、気がついたね」

と、おのぶサンがガラガラツと笑うのだ。

「なんぼ、私とこの大将と恰好が似ているからって、別に、親類
のオバサンが来たなんてんで、懐なついたんじやないよ。つまり、相
縁奇縁ってやつだろうね。私もこいつも、知らぬ他国を流浪るろうの身
の上だから、言葉は通じなくても以心伝心でやつ」
「おい姐さん、以心伝心で口説いちやいけねえよ」

と、白粉つ気はないが、道化らしい顔がのぞく。

馬を洗う音や、曲奏の大喇叭チューバの音。楡エルムの新芽の鮮緑がパツと天

幕に照りはえ、四月の春の陽がようやく高くなるうとするころ、サーカスのその日の朝が目醒める。しかしまだ、アー・ペラー鯨狼をここへ売ったのが何者かということが、最後の問題として残っているのだ。それに、親方が次のように答える。

「なんでもね、二つちも三つちもいなくなつた捕鯨船の後始末とかで、こいつを売つたやつの名は、クルト・ミュンツァ、です。住所はイースト十四番街の高架線の下で」ヒシラ

この、鯨狼の出所については折竹よりも、むしろ、このほうの専門家のケプナラ君に興味多いことだ。ところが、どうしたこと

かそれを聴くと、ちよつと、折竹が放心の態になった。ただ、

「クルト・ミュンツァ
[Ku:rt Mu:nzer]」と呟いている訳は　あの、未知国の所在

を売るといふ匿名の手紙の主の、K・Mというのがクルト・ミュンツァの頭文字。

事によつたら、これが導きとなってあの手紙のわけも、また、

それに関連しているらしいルチアノ一派の策動の意味も——すべてが明白になるのではないか。してみると、この奇獣アー・ペラー 鯨 狼も

全然無関係ではない。いや、無関係どころか極地に春がきて、ながい闇が破れるようにすべてを分らせる——と、折竹はそんなように考えてきた。

金鉞、ダイヤモンド鉞それとも石油か　いま、ルチアノ一味

が全能力をあげて、それに打衝ぶつかろうという意気が仄ほのみえるだけに、……秘密の、深い深い底をのぞき知ろうとする、彼はいま完全に好奇心の俘虜。

「折竹さん、海獣けものとばかり交際つきあってて、あたしを忘れちゃ駄目だよ。一度、ぜひ伺わせて貰うからね」

「来給えな」と言ったのも、上の空。おのぶの言葉も瞬後に忘れてしまったほど、心は、クルト・ミュンツァが住む高エル・トラツク架線の
下へ。

その後、彼とケプナラがイースト・サイドへ出掛けていった。

そこは、二十七か国語が話されるという、人種の坩堝るっぼ。極貧、

小犯罪、失業者の巢。いかに、救世軍声を囁からせどイースト・リ

ヴアの澄まぬかぎり、このどん詰りデッド・エンドは救われそうもないのだ。

「ここが、二〇九番地だから、この奥だろう」

と、皮屋と剃刀屋かみそりのあいだの階段をのぼり、突き当りのボロアパート蜂窩へはいつてゆく。

廊下は、壁に漆喰しつくいが落ちて割板だけの隙から、糸のような灯が廊下にこぼれている。年中、高架線の轟音と栄養不足で痛められている、裸足はだしの子供たちがガヤつく左右の室々。やつと、さぐり当てたクルト・ミュンツアの部屋を、折竹がかるく叩ノックきをした。

「入れ。誰だ、マツデンかい」

あけると、意外な男二人にオヤツと目をみはる。どこか悪いらしく寝台にねているミュンツアは、三十恰好かっこうの上品な面立ちの

男だ。折竹が、来意を告げると踊りあがるような悦び。あのK・Mとは、やはりこのミュンツア。

「ああ、来てくださったですね。いろいろ、ご都合もあろうし、駄げ違ったことと思っていましたか」

と、やがてあの不思議な手紙を折竹に出したについての、極洋に横たわるといふ知られない国の話をしはじめた。

ウインターワ
潜

「折竹さん、あなたは五年ほどまえ北極探検用として、
ツサー・ファールツォイク
水客船 というのを考案したミュンツア博士をご存知で
すか」

「知っています。じゃ、おなじミュンツアとなると、あなたは？」

「あの、アドルフ・ミュンツアは僕の父です」とクルトは感慨ぶ

かげに言うのだ。

「父は、ご存知のとおりアイステツケの造船工学家でしたが、極地の大氷原を氷甲板として、そこに新ドイツ領をつくろうという、夢想到燃えていたのです。新極北島——と、父は氷原上の都市をこう呼んでいましたよ。ところが、まもなく一隻を自費でつくりあげ、一九三三年には極洋へむかいました。僕は、体質上潜行に適しないので、捕鯨船の古物である一帆船パークにのって『ネモ号』というその潜船につ蹤ついていったのです。すると、運の悪いことには半月あまりの暴風雨。無電はこわれ散々な目に逢ったのち、『ネモ号』を見失って漂流一月あまり。やつとグリーンランド東北岸の“Koldewey《コールドウェー》”島の峡湾フィヨルドに流れついて、通りが

かりの船を待つていました」

「その間、ネモ号は」と、ケプナラ君がロイド眼鏡をひからせる。「なにしろ、無電が壊れているんで、サツパリ消息が分りません。すると、そこへ運よく一隻の捕鯨船が通りかかって、僕は無電の修理材料をもらいました。修理が成った、と、それから三日ばかり経った夜、偶然、ネモ号の通信をとらえたのです。ご想像ください。まるで、蒼白いランプのような真夜中の太陽のしたで父の通信と分ったときの、私の悦び。しかしでした」

「では、その通信にはなんとありましたね」

「奇怪なことです。僕は、父が気違いになったとしか思えなかつた。どうです、たとえば貴方がたがこういう無電をうけたとした

ら……」と、クルトの目が、じつとすわって、当時の回想が胸迫ったような面持。それは、たぶんお読みになる皆さんもアツと言うだろうほどの、つぎの奇怪極まるものであった。

——いま、われらは「冥路セル・ミク・シユアの国」に近し。ついにグリーンランド内地に新領土を発見す。

およそ、世に分らないということにも、これほどのものはあるまい。冒頭でもいったように国際法の規定では、沿岸を占めれば奥地も領土となる。いま、グリーンランドで新領土の余地などというものは、誰がみても皆目ないはずなのに……。では、そのミユンツァ博士の通信は、戯たわむれか狂気沙汰か

「僕は、その意味がいまだに分りません。もつと、上等な頭で考

えたら分るのかもしいないが、僕にはどうも投げ出すより仕様が
ない。で、その無電はそれで切れました。あとは、待てど暮せど、
なんの音沙汰もない。仕方なく、僕は父をあきらめて、その峽^{フイヨ}
湾^{ルド}を出ていったのです」

「なるほど、お父さんのミュンツァ博士は、死を確認されている」
と、折竹が沈んだ顔をして、呟いた。

しかしその時、彼の胸をサツとかすめた一抹の疑問。ことによ
つたら、博士は「冥路^{セル・ミク・シユア}の国」の不思議な手に、狂人となつて
いたのではないか。死体が、櫓を駆るように招かれてゆく途中、
あの奇怪な無電をうったのではないか。しかし、その考えはそ
の場合に消え、彼は、別のことを訊きだした。

「時に、クルト君は僕以外のものに、この話をしたことはないかね」

「あります、ただ一人だけです。それは、一昨年父をさがしに、グリーンランドへ行つたのです。その時、あの奇獣のアー・ペラー鯨狼をつかまえた。だが、その探検も結局空しくおわり、僕は全財産を摺り結核にまでなつて、とうとうこのイースト・サイドへ落ちこんだ。では、なぜ本国へ行かぬかと仰おっしゃ言るのですね。それは、あのユダヤ人排斥でとんだ飛ばちちりをうけたからです。

当時、本国は鼎かなえの湧くような騒ぎ。密告が密告につきユダヤ人ならぬ僕までが、本国に帰れないことになりました。そうした、困窮のなかを父と面識のある、タマニー区検事長のロングウエル

氏に救われました。僕が、こんな汚ないところでも死なないでいるのは、ロングウエルさんのお蔭といつても、いい。むろん、このことは一仍いちじぶ始終話したのです」

そのロングウエル氏は、ニューヨーク暗黒街にとれば仇敵のよ
うな人物。清廉せいれん、誘惑をしりぞけ圧迫を物ともせず、ギャング
掃蕩そうとうのためには身命さえも賭そうという、次期州知事の候補者
の一人だ。そうになると、ルチアノ一味とは反対の立場にある、ロ
ングウエル氏が知るといふのではなんの意味もなさない。なぜ、
ルチアノ一派がそれを知っているらしいのか、折竹がそのことを
訊いた。

「クルト君、君はルチアノの連中と関りあつたことはないかね」

「ルチアノ」とクルトは驚いたような顔をして、

「僕が、なんで汚けがらわしいあの連中を、知るもんですか。驚いた。それは、どういう訳ですね」

ルチアノと、知らない！　ますます、折竹は分らなくなつていくばかり。まったく、これはクルトが嘘を言っているか……、それとも、隠し事でもしてない以上、腑ふに落ちないことだ。と、彼はいきなり語気をつよめ、

「君はまだ、僕に隠していることがあるね。もし、金にしようというのなら、幾らでも出させるが……」

「えっ、何のこつてす」と、クルトはポカンとなる。

それに、嘘の分子が微塵もないということが、折竹にはハツキ

りと分るのだが……。しかしそれでは、ルチアノ一派がどうして知っているのか？　まず彼らの大好物である富源のようなものでもない限り、またそれを、あの一味が知る機会がないかぎり……。と、なおも折竹は執拗に畳みかけてゆく。

「では君が、僕に未知の国の所在を、売ろうと言ったわけは？」

あのお父さんの怪無電以外に、もつとこの問題を現実付けるものが、なけりやならんね」

「それは」とクルトがぐびつと唾をのむ。ついに、ここに最終のものが現われるか。「それは、あのアー・ペラー鯨狼がどこにいたか。私
が、あの奇獣をどこで捕まえたか」

「なに、鯨狼を捕獲した場所」

「そうです。父のあの無電を現実付けるものが、鯨狼の捕獲位置にあるのです。それが、北緯七十四度八分。西経……」

と、言いかけたとき、怖ろしいことが起った。とつぜん、窓硝^ガ子がパンと割れたと思うと、クルトの顛顛^{こめかみ}にポツリと紅いものが……。彼が、ポカンと馬鹿のように口を空けていたのも瞬時、たちまち、崩れるように床へ転げ落ちてしまったのだ。

ルチアノ一味の手が肝腎なところの瀬戸際で、クルトの口を塞いでしまったのである。西経……、ああそれが分れば。

「セル・ミック・シユア
冥路の国」争奪

ルチアノの魔手——それはいわずと分ることである。まったく、訳も分らぬことばかりが引き継いでおこる事件のなかで、なにより骨子となるミュンツァ博士の怪無電が……やつと、ヴェールを除ろうとすればもうこの始末。可哀想にと、折竹も暗然と死骸をみている。

ルチアノめ「冥路セル・ミク・シユアの国」になにを狙っている　何を何と、ただ盲目さぐりの焦いらだたしいその気持は、くそつ、ゴージャンノットの結び目に逢ったかと、折竹も嗟嘆さたんの声をあげるばかり。という、その錯綜の謎は並べてみてさえも、皆さん、頭が痛くなるではないか。

一、クルトの父ミュンツァ博士が、グリーンランドの内地に新

ドイツ領を発見したという。しかしそれは、じつにどうにも考えられぬこと……、でまざる「冥路の国」の魅魍みもうのため狂人になったとしか思えぬ。

二、ところがそれに、せがれ倅のクルトはアー・ペラー鯨狼の捕獲位置から、一脈の真实性があるという。まず、その地の緯度をいい次いで経度をいおうとしたとき、飛びきたった銃弾に斃たおされた。それは、疑う余地もないルチアノ一味の仕業。

三、では、ルチアノ一味はどこからその情報を手に入れたか。クルトは、せいれん清廉頑検事のロングウエル氏に話したのみと言うが、そのロングウエル氏はルチアノ一派の対敵——その辺の消息が、皆目分っていない。また、その地ヘルチアノ一味が食指を動かし

ているというについては、なにか驚くべき富源のようなものがないければならない。しかしもう、その事についても怪無電の真相も、すべてはクルトが墓場へ持って行ってしまっている。

と、踏み彷徨さまようような当て途もない気持のなかで、なんだか折竹は魔境の呼び声をうけてくる。謎を解く、それもクルトへの弔い合戦か。と、腰を抜かしたようなケプナラを促がしながら、やっと彼は死人のそばから腰をあげたのだ。

その数日後、彼はロングウェル氏に逢った。しかし、加害者の見当についても直接証拠のないかぎり、ここの、州刑法ではどうにもならない。ただ、クルトの死を無駄にさせたくない——この点では完全な一致をみたのだ。

ルチアノ一味を、向うにまわして「冥路セル・ミク・シユアの国」を踏破する。怪無電の謎を解き魔境征服という以外にも、不義の徒に対する烈々たる敵愾てきがいしん心。まず、彼らの策動を空に終らせることが、この際クルトへのなによりの手向けたむだろう。と、いよいよ「冥路の国」探検ということになった。

がその間、彼はおのぶサンの来訪を頻繁にうけていた。

「ちよいと、あたし……また来たわよ」といった具合で、まい日のようにやって来る。折竹も、三度に一度はうるさそうな顔をす
るが、こういう時も、

「お邪魔はしないわよ。あたしにかま関わらず、お仕事をやって」と言う。そして何時までも、折竹の向う側にかけていて、雑誌などを

見ながらもちよいちよいと彼をみる、その目付きは唯ただごと事ではない。折竹も、このごろでは慄ぞつとなつている。

また来たわよ、ご迷惑ねえ——と、言われるときのあの気持と
いったら、悪女、醜しこめ女も典型的なおのぶサン。三十六貫の深情か
と思うと、胃のなかのものがゲエツと出てくるような感じ。

それに、ここになお一層悪いことは、今度おのぶサンも探検隊
について「冥路の国」へゆくということになつている。それは、
アー・ペラー鯨狼の給仕者という役。ではなぜ、鯨狼が探検に必要なのだ
ろう　　というのは、棲息地の記憶だ。これは、あらゆる海獣を
通じての顕著な習性で、どこで鯨狼が捕えられたかということ、
観察しつつ知ろうというのだ。

してみると、おのぶサンとは当分離られぬわけ。それを思うと、ゲンナリしてしまう。

だが、折竹は神様ではない。もし神様ならばこう頻繁におのぶサンがくる理由わけを覚らなければならぬ。なにか、おのぶサンには惚れた腫れた以外に、折竹に言いたいことがあるらしい。で、これは、ニユーヨークを去る出発の前夜のこと。

その晩、昨日は来ないからやって来るなど思っていると、案の定、扉を叩く音がする。彼は、それを聞くとぞくつとなつて来て、寝室に入りそつと息を凝らしていた。すると、

「折竹さん、いないんですの」と声がする。帰るだろう、黙っていりや行ってしまふだろう——と、思うがなかなか去る気配がな

い。そのうち、扉のしたからスウツと白いものが……。封筒らしい。さては、奴め打ち開ける気持だな……。と、思ったとき向うの気が変つたらしく、今度は、その封筒がスルスルつと引つ込められてゆく。

それに、折竹の全運命が掛つていようとは、神ならぬ身の知るよしもなかつたのだ。

探検隊は、古くからある捕鯨港のサレムで勢揃いをし、五月十日の朝乗船「デイスカヴァリー 発 見」号には、ぜんしやう 前 檣たかく出航ブルー・ピー 旗ターがひるがえる。いよいよ、極北の神秘「冥路の国」へ。

ニュー・ファウンドランドを過ぎラブラドル沖にかかると、もう水の色もちがってくる。それまでの藍色がだんだんに褪あせ、

一日増しに伸びてゆく昼の長さとは正反対に、温度はじりじりと下つてゆく。すると、グリーンランドの西海岸をみるデヴィス海峡にかかった時、「デイスカヴァリー 発見」号の全員がすくみ上げるようなことが起つた。

水平線が、とつぜんムクムクと起伏をはじめたかと思うと、みるみる、無数の流水が「発見」号をおそつてくる。船は、あちこちに転針してやつと遁のがれたが、じつに前門の虎去れば後門の狼のたとえか……極鯨吹きあげる潮柱のむこうに、ポツリと帆影のよなものを認めただ。まもなく、水夫長ボースンが案じ顔にやつてきて、「どうもね、あの横帆船シップにや見覚えがあるんですがね」「とは、どういう事だね」

「あつしや、あれがルチアノ一味の『フラム号』じゃねえかと思
います。全部、新品の帆なんてえ船は、たんとねえんだから……」

そこで、補助機関が焚かれ、船脚が加わった。全帆、はり裂け
んばかりに帆桁ヤードを鳴らし、躍りあがる潮煙は迷濛な海霧ガスばかり。
そうして、二、三海里近付いたとき双眼鏡をはずした水夫長が、

「やっぱり」と、言葉すくなに折竹をみる……その顔には言外の
恐怖があった。

まるで、送り狼のような「フラム号」の出現。それに、ルチア
ノやフロアが乗っているかどうかは知らないが……とにかく、こ
の二探検船の前途になに事が起るといふことは、もうここで贅ぜ
いげん
言を費やすまでもないだろう。

自然への反抗とともに、ルチアノ一派との闘い、氷原の道には、ますます難苦が想像されてくる。

そこからは、かつての北極踏破者ピアリーが名付けたという、
ミドル・アイス中部浮氷群の広漠たる塊氷のなか。やがて、《Kangek》《カング
 ツク》《岬を過ぎ》、《Upernavik》《ウペルナビック》《島を右に
 見て、いよいよ拠点となるホルムス島付近の「デイヴルス・サム悪魔の拇指」と
 いう一峡湾に上陸した。仮定「セル・ミク・シユア冥路の国」の位置はこの地点
 からみると、真東に二百五十マイルほどのあたりに当る。

この峡湾には、まるで人間への見せしめのような、破船が一つ
 横たわっている。ジョン・フランクリン卿の探検船「ザ・テラー恐怖」
 号の残骸が、朽ちくさった果ての肋骨のような姿をみせ、百年ば

かりのあいだ海鳥の巢になっている。いずれは「冥路の国」を衝くものはこうなってしまうのだと、はや上陸早々魔境の威嚇に、一同は出会ったような気になった。まったく、そこはなんという陰気なところか。

海霧たちガス罩こめる、海面を飛びかよう海シー鷗ガルやアビ鳥ルーシ。プランクトンの豊富な錫色の海をゆく、砕氷や氷山の涯しない行列。なんと、幽冥界の荒涼たるよ——とさげんだ、バイロンのあの言葉が思いだされてくる。しかしそこで、攻撃準備は着々と進められ、北部 Etha 《エター》 地方のエスキモー人があつめられてきた。

そうになると、問題なのはフラム号の行方。

「いるぞ。暫く見えないから断念あきらめたと思ったら、『フラム』号

のやつ「Kuk《クク》」島にいやがる。どのみち、チャンバラが
始まるなら、早いほうがいいな」

「フラム」号の、決着を見届けるため沿岸をさぐっていた一隊が、
帰ってくればこんな話だった。クク島とは、ここから約二十マイ
ルばかりのところ。さだめし、向うも上陸隊がでて、この隊と競
うだろう。風雲も死闘もそのうえの事と、いよいよ二十台の犬
籠いぬごが氷原を走りはじめたのである。

アー・ペラー

鯨 狼の檻、その餌となる氷漬の魚の箱。ダブダブ揺ぐよう
なおのぶサンの肥ひく軀も、今はエスキモーさながらに毛皮にくるま
っている。

氷原と吹雪、氷河と峻しゅんけん嶮けんの登攀とうはん。奈翁のアルプス越えも

かくやと思われるような、荷を吊りあげ、またおのぶサンを引きあげる一本ロープの曲芸。そのうち、落伍者が続出する有様。残ったのは、かなり名の知れた氷河研究者のザンベック、それに、ケプナラが気丈にも残っているが、もう、白人はこの二人だけにすぎない。しかも、寒気はますます厳しく、零下四十五度から六十度辺を上下している。

とこれは、七月末ごろのことだった。もう「ディヴルス・サム悪魔の拇指」から百マイルも来たと思うあたりの、一隘路あいろのなかで大吹雪におそわれた。

天地晦冥となり、砂を吹きつけるよう。くるくる中天に舞う濃淡の波に、前方の連嶺が見え隠れしていたのも、暫し。やがて、

一面が幕のようになり、咽喉のどの奥までじいんと知覚が失せてくる。みると、橇しょう犬けんどもは悄しょうぜん然ぜんと身をすくめ、寒さに嗅覚がにぶつたのか、進もうとはしない。刃の風とまつ暗な雪のなかで、一同は立往生してしまった。

と、やがて霽はれ間が見えてきた。すると、ケプナラがあつと叫んで、白みかけてきた前方を指差すのである。

「アツ、なんだありや。ルチアノ一味の襲撃じゃないか」

みると、そこを横切つてゆく数台の橇そりがみえる。来た、来た。乾魚や海象の肉をつめた箱を小楯に、一同は銃をかまえ円形をつくつたのである。と、どうした訳かそれを見た、おのぶサンがゲラゲラつと笑いだすのだ。

極光下の新日本

「冗談じゃない。ここで、この隊を殺やつちまったら元も子もないじゃないか。ねえ、『冥路セル・ミク・シユアの国』まで櫓跡に蹤ついて行って、そこでというなら話になるがね。だけど私や『フラム』号の連中はすこしも恐かアないよ。恐いのは……」

と言いかけたが吹きつゝのる風のために、惜しいかな、続くものが聴えない。しかしこれは、あとで分ったことだが、蜃気楼しんきろうだつたのである。「冥路の国」へとゆく、一人のエスキモーの櫓イマージ。それが、一つの山が数個の幻嶽をだすように、いくつもの幻

景ユとなつて現われた。そういう、座興のあとで吹雪が霽れると、今までいた犬が一匹もみえない。

「オヤ、どうした」と、思っていると彼処あちこち此処こちの雪のなかから黒い鼻先がひよくりひよくりと現われてくる。犬は、こういう酷寒の地では雪中にもぐつて、眠る——と、いうことが重大な使し喚そとなつた。その夜、これまで解けなかつた「冥路の国」の怪が、彼にやつと分つたような気がしたのだ。

「よくマア俺も、此処までやってきたものだ」

と、折竹が感じ入つたように、呟くのも道理。

まず、無名の雪嶺を名づけた、P1峰を越えたのが始め、火ひ箭やのように、細片の降りそそぐ氷河口の危難。峰は三十六、七、氷

河は無数。まったく、この三月間の艱苦かんくは名状し難いものだった。しかし、ここで不思議に思われることは、この極地にくるとおのぶサンの態度が、それまでのネチネチさを振り落してしまつたようなことだ。

「あの女は、寒気に充分な抵抗力がある。なにしろ、馴となか鹿かいがいるあたりの北方ナダへいつてさえ、肉襦袢タイツ姿で平気でいれる奴だ。しかし、どうも近ごろ様子が變つている」

さつきもおのぶサンは、なにやら意味ありげなことを呟いた。折竹には分らぬ異常なことを知つていふこと、その一事でも察せられなければならぬ。しかし瞬後には、彼はもうおのぶサンのことを考えていない。

「いずれ、フラム号の連中も俺を追ってくるだろう。橇犬の嗅覚は、磁石よりも鋭い。奴らは、前に往った犬の糞尿や凍傷の血の滴りを、なん月後でもちゃんと嗅ぎ分けるから……」

しかし、この鉄の男は顔色も変えていない。微妙な、ほのめきを投げる深夜の太陽のしたで、とおい、なだれ雪崩の音を聴きながら、じつと考えているのだ。周囲の、さんてん山巔も氷河もまったく死の境界。人を狂わせる極地特有の孤独のなかで、彼の頭はますます冴えるばかり。

「人間は……いや、あの人種は、ことによつたら冬眠ができるのかも知れない。そのほかに『セル・ミック・シユア冥路の国』の謎を解く方法はな
いだろう。エスキモーが、『冥路の国』へ招かれるときは、こん

な状態になる。脈が聴きとれず消えなんとし、体温は死温程度にさがってくる——それは、取りも直さず冬眠とおなじ状態だ。

ことによったら、異常な寒気に逢った場合、そうなるのではないか。そして、幻覚を見、遮二無二身をおこし、橇をかって氷の涯へと飛んでゆく。もちろん、そうした場合だから、なんの苦痛も感じない。運よく氷クレヴァス罅にも落ちずに行き着けた奴らが、

『冥路の国』の中で一部落を作っているのではないか。冬中、体中の脂肪に養われて、氷のしたで眠る。春になると醒めて、麝マクス香オクゼン牛を狩る。——そういう、冬眠の生理がエスキモーにあるのではないか」

彼は、その考えにひじょうな自信をもっていた。小さな極光が、

ぶよぶようごく真赤な虹をあらわし、その核心からでる金色の輻ふく射線くしやせんが、氷罅クレヴァースのうえをキラキラつと流れてゆく。翌朝も、隊はいつもながらのように、氷を踏み踏み黙々と発つていったのである。やがて、十日ばかり経つと連嶺が切れ、一行は盆地のよな氷原のなかに出た。と、朝餌をやるうとして檻の戸をあけたおのぶサンの手をかい潜つて鯨アー・ペラー狼がとび出した。

「来てよ、鯨狼がとび出ちやつたよオ」と、おのぶサンがあわてどなる間に、鱭ひれでヨチヨチとゆきながら大分な距離になつていゝ。一同が、網を片手に走りだそうとするとき、とつぜん、鯨狼が氷罅のなかに落ちたのだ。その縁にきて下をのぞき込んだとき、折竹の顔色がみるみる間に變つてゆく。

「オヤ、この氷クレヴァス罅アスのなかは、青い光じゃない。エメラルド・グリーン 緑玉グリー色ンをだすのは、海シー氷アイスじゃないか」

普通陸地の氷罅は、内部なかが美麗な青い光に染まっている。しかしここは、陸上にもかかわらず緑玉色の鮮光、それは、まず海水以外にはないことだ。で、試みに綱をさげると、その端がしつかりと湿ってくる。甜なめると、それが海水の味。さすが折竹も、オロオロ声になつて、

「諸君、僕は鯨アー・ペラー狼ペラーのために、大変な発見をした。ここは、グリーンランドを二つ三つに割っている、せまい海峡の一部なんだ。ミュンツァ博士が、なぜ新領土云々の通信をしたかということが、これでハッキリと分つた。

つまり、南部以下の沿岸をデンマークが占めた。だから、奥地も北部もデンマーク領になっている。しかし、いまここに現われた新瀬戸の発見で、ここから北が別の島であるのが分つた。ここは、隊長の僕の日本の領土になる。もし、本国政府が追認してくれば、この極北の新島の先占宣言が成立する」

じつに、それは厳肅な瞬間だった。それまで氷に覆われて現われなかつたこの瀬戸を、ついに見付けだした偉大な発見者、折竹。前ミュンツァ博士のような不備なものではなく、もし政府が躊躇ちゆうちよせず立ちどころに追認すれば、グリーンランドの北部が赤い日本色で染められる。

まったく、その日一日は夢中裡の気持だった。こうなると、た

だ気遣われるのがルチアノ一味の追跡。注意に、注意しながらその氷原を過ぎ、奥へ奥へと「冥路セル・ミク・シユアの国」に向ったのである。

霧が濃く、峰も尾根も妙に歪んでみえる。と、その霽れ頃に見上げるばかりに高い、大きな氷河口のまえへ出た。氷の断涯が無数の滝を垂らし、屹きつぜん然とそびえている。すると、折竹が急に何を感じたのか、荷物のなかから微動計を取りだした。そしてその夕、おのぶサンにこう言いつけたのである。

「あの氷河は、じつを言うの一つのものではない。猛烈な吹雪があつて積つたやつが、氷河のうえに固まって乗っているんだ。あいつが動きだすと氷アイス・フルット海海嘯嘯というのになる。危険だ。ケプナラ君に避難をいつてくれ給え」

と、その日の夜半ちかいころ。とつぜん、万雷の響を発し、地震かと思われる震動に、折竹が スリーピング・バッグ 寝 囊 からとび出した。出ると、じつに怖いながら美しい火花に包まれた氷海嘯が、向うの谿 たに へ落ちてゆく。よかつた、予知したことがなによりだった。と、まず一安心となった。その翌朝のことだ。とつぜん一人の工スキモ一の、喧 けたた ましい声で起されたのである。

「隊長、大変ですが、起きてくらつせえ。ザンベックさんはいねえし、ケプナラさんはオツ死 ち んでいるだ」

驚いてゆくと、ケプナラは避難していない。やはり、以前の所 テント に天幕をはつていて、みるも哀れな死を遂げているのだ。氷海嘯の端に当たたらしく鑢 やすり で切つたように、左腕、左膝から下が無残

にもなくなっている。折竹は、おのぶサンを呼んで、険しい目で見つめ、

「君は、昨日僕の命じたとおりに、言ったのだろうね。ケプナラ、ザンベック両君に避難しろって」

「ああ、あんなこと」と、おのぶサンはケロツとして、

「あたし、なんだか忘れてしまったらしいよ」

「馬鹿っ」と怒気心頭に発した折竹がごと一つ殴りつけ、

「なんのために……。君は、あの二人を殺してしまっても、同じだ」

「殺していいでしょう。どうせ、殺さなければ今夜あたり、あんたが殺やられるにきまっているから……」

「なに」

と、気を抜いたところへおのぶサンの手が伸びて、折竹の頸筋をつかみ、ぐいと吊しあげた。河馬女ファティマの大力には、彼も敵かなわない。そのまま、片手にさげた彼をぐんぐん運んでゆき、氷クレヴァス罅ヒスのなかへぶらんと宙吊りにしたのだ。

「人が、せっかくお前さんを助けてやったのに、引つ叩くなんて……しばらく怖い思いをして、頭を冷ますがいい。お前さんは、ルチアノの『フラム』号をどう思っているね」

「オイ、上げろよ」折竹も悲鳴をあげはじめた。下をみれば、千せん仞じんの底から燃えあがる、青の光。

「じつを話すと、あのロングウエルとルチアノは同腹ぐるなんだよ。

一体、アメリカというのがそんなところで、正邪も仇同志も一度
実^{ビジネス}業となれば、それまでの行き掛りなんぞは、何でもなくなつ
てしまふんだ。で、クルトがすべてをロングウエルに話したね。
お前さんには言わなかつたらうが、^{アー・ペラー}鯨 狼が捕われた位置を、ロ
ングウエルは経度まで知っている。すると、海獣が遠い陸地のな
かにいる。可怪^{おか}しい。それに、ミュンツァ博士のあの無電がある
だろう。ことによつたら、海峡みたいのものがズウツと内地へ伸
びているんじゃないか、——ロングウエルはこう考えたんだ。

しかし、こんな奥地へ行けるものといや、お前さんのほか誰が
あるだろう。こいつを一番利用してやって、^{ことじようじゆ}事成 就の暁には
殺^やつてしまおう。というのが腹黒検事の考えさ。だから、じぶん

を隠すためにルチアノを使って、すべてをギヤングの仕業らしく見せかけたわけだ。ケプナラも、頭巾をとりやロングウエルの腹心。へん、ご親友がお気の毒さまだったね」

「だが、どうして君は、それを知ったんだ」

「立ち聴きさ。あんたが、曲馬団サーカスにくるまえケプナラがやってきて、親方とひそひそ話をやっていた。うちの親方だって、猶太仲ジユウ

間だから」

「いったい、猶太人ジユウがどうしたというんだ」

「あの、ツイオン議定書とかにある、猶太建國ユダヤさ。こんな氷の島だから何にもなるまいけれど、とにかく、ながい懸案だった猶太国ができあがる。そのため書いたロングウエルの筋書に、うかう

かお前さんが乗っちゃまったというわけさ。馬鹿、私がいなかったら、どうなったと思う。とうに、ニューヨークにいるうち打ち明けようと思つたけれど、私の言うことなんぞは信用しまいと思つたし……。第一、お前さんは私が嫌いだろう」

おのぶサンは、それだけしか言えなかつた。こみあげてくる恋情を、言い得ない悲しさ。折竹も、感謝の気持溢れるようななかにも、氷海嘯のため、食糧の大部分をうしない、「冥路セル・ミク・シユアの国」探検を断念せねばならぬ、切なさ。ただ、米大州に現われたはじめての日本領を、政府が追認するのを切に祈りながら……。氷クレヴのなかでブランブランに揺れていたのだ。

アス罅

青空文庫情報

底本：「人外魔境」角川ホラー文庫、角川書店

1995（平成7）年1月10日初版発行

底本の親本：「人外魔境」角川文庫、角川書店

1978（昭和53）年6月10日発行

初出：「新青年」1940（昭和15）年6月号

※副題は底本では、「遊魂境《セル・ミク・シユア》」となっています。

※校正には「人外魔境」桃源社、1969（昭和44）年1月25日2刷、

「「新青年」復刻版 昭和15年（第21巻）」本の友社、2002（平

成14)年8月10日復刻版第1刷を参照しました。

※地図画像は、初出誌と同じ桃源社版のものを用いました。地図右上の「探検家エリクゼン死去地」は、底本では、「探検家エリクゼン基地」になっています。

入力：藤真新一

校正：鈴木厚司

2003年2月10日作成

2014年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

人外魔境

遊魂境

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 小栗虫太郎
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>